

大須賀川流域を支配した 首長の墳墓

香取遺産

Vol.44



▲禅昌寺山古墳出土遺物

上右：石枕 上左：銅鏡片 下：右から鏡板・杏葉・馬鐸

禅昌寺山古墳は、大須賀川下流の沖積平野、大戸川字中宿にある禅昌寺の南側隣接地にあります。現在は古墳の大半が削平されて径10mほどの塚状となっていますが、全長60〜70mの前方後円墳であったと推測されています。

かつて、この古墳を削平した際に多数の遺物が出土しました。銅鏡や石枕をはじめ、武器(直刀・矛・鉄鏃)、武具(衝角付冑・挂甲小札)、馬具(「f」字形鏡板付轡・劍菱形杏葉・馬鐸)などです。正式な発掘調査で出土した

ものではないため、どのような状態で埋められていたのかは不明ですが、死者と一緒に納められた副葬品であることは間違いないささうです。

銅鏡は縁部の破片です

が、中国からの舶載鏡と考えられます。石枕は遺骸の頭部を載せるための石製の枕、衝角付冑は横長の鉄板を曲げて鉢形を作り、鉄板の両端を前面で合わせた冑、挂甲は小札と呼ばれる鉄板を縫い合わせて作った甲で、鏡板は轡の銜の両端に付けられた金属板、杏葉と馬鐸は馬の胸や尻に付けられた馬飾りです。中でも、鏡板と杏葉は、鍍金した銅板を鉄の地金の上に張った「鉄地金銅張」という技法で作られたもので、県内では有力古墳から出土しているものです。

このような豊富な副葬品をもつ禅昌寺山古墳は、まさに首長墓と呼ぶにふさわしく、そこに葬られたのは大須賀川流域一帯を支配した人物であったと考えられます。

ます。

また、近隣の森戸地区から谷中地区にかけて、大戸天神台古墳、権現前古墳、大法寺古墳、塚越古墳など、禅昌寺山古墳と同じぐらいの規模と推測される古墳がいくつか確認されています。最近の研究では、大戸天神台古墳(4世紀)↓権現前古墳(5世紀後半)↓大法寺古墳(6世紀前半)↓禅昌寺山古墳(6世紀中ごろ)の順で継続的に築造されたことが分かっています。この地域を支配した歴代の首長墓と言えるでしょう。

大須賀川下流域に営まれた古墳群は、一地域の中で首長層の変遷をたどることが出来る好例と言えます。問い合わせ

生涯学習課 ☎(50)1224